



樋口留美医師

医療

ましまし
やなし

最前線

県立中央病院から

〈321〉

肺がん患者に対してロボットや胸腔鏡を使って行う手術で、山梨県立中央病院は従来よりも傷口が

た。

呼吸器外科の樋口留美医師によると、肺がんの手術は、腫瘍の大きさなどを考慮して開胸で行う場合を除き、胸腔鏡かロボットを用

ボットで5カ所程度の小さな穴を脇の下に開け、カメラや鉗子などの医療器具を入れて腫瘍を取り除いてきた。

昨年から新たに取り入れ

合は基本的に1カ所、ロボットの場合は2カ所済みようになった。傷が少ないため術後の痛みも軽く、これまで6日間程度かかっていた入院期間も最短3日

た。このような新方式を採用している医療機関は全国的に見ても少ないという。病院では進行した肺がん患者に対し、がん細胞に対する免疫細胞の攻撃力を回復させる「がん免疫療法」を含む薬物療法と、手術を組み合わせるケースも増えている。以前はがんが進行して治療が難しかった患者でも、最新の肺がん治療により、完治できる可能性が高まった。

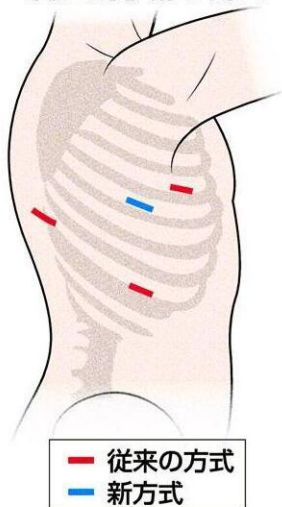
肺がん手術傷口少なく 体への負担減 入院短縮

少ない手術を取り入れている。術後の痛みが軽減でき、体に負担が少ないのが特長。医療技術を高めるなどして導入に結びつけ

いて行う場合が多い。従来たのは、開ける穴の数を少は胸腔鏡で3カ所程度、口なくする方式。胸腔鏡の場

う。に短縮できているとい

肺がん患者 胸腔鏡手術の傷口



— 従来の方式
— 新方式

胸腔鏡の手術では、一つの穴から複数の鉗子を入れると鉗子同士がぶつかって操作しにくくなるが、新方式はぶつからないように改良した鉗子を用いて行う。個々の医療技術を磨いて医療チームでも共有してき

ます。一方、樋口医師は「がん免疫療法による体への負担は大きい」と説明。「手術は痛みが少ない方法を取り入れることで、より良い医療を提供していきたい」と話している。